



萬葉抄
中



去来抄 中

同門評

後も然り柳のさし取まひ少 芭蕉

浪化集よさるる柳とかせり乞、予り誤傳するなりかきて
史邦々小文庫の柳のさしと改む支考曰さるる柳なりいそ
改傳るや去来曰さるる柳とをいふに支考曰柳のさしひんを
も然り際る如しと比論せるも然り去来曰さるる柳のさしに
さしりたるなりさるる柳といふもあてま支考え傳る故
かきて予り誤るを寸支考曰吾子の説ハリるなり



只藤の柙と交へて大州日朝の序をいふ趣向を
支考といふ如くもむ去来曰藤名のあはれをいふ
口惜し比論ありてき難くもいふ人出さるるは
いくさう及ふ一は格信も又各別なりと論は許六曰
先師の短尺よさばる柙とありてと柙のさうとい首
切きなり去来曰そ切のさうハ平々閑々よ異今篇に
おのれ先師の文子柙のさうもほまあり許六曰先師
あともり出さるる句多し真跡も證さるるなり
三子皆と藤の柙の説なり後賢批判したまへ

去来曰いふは故やありてん藤のさうハ汝の信し重なるは

人の子は藤のさうと江府より本始はふと後大切の柙一本去来に
ついでに支考も註たすといふと藤のさうも
除れどもに浪化集撰の半は先師化わらへ此句は
むかへて藤の事と恨て入集りまあせける

雪は日小免乃皮の幣つらき 芭蕉

魯町曰此句意いふ去来曰あまもともと遊びてと
あはれもとも乃業と思はるる一は活て理會すといふ
機弁を踏破して知へて先師は句を詔はれに予
甚感節寸先師曰是を悦ん者越人と汝のさう
らむと思ひにさうしてさうとて藤のさうの機嫌

なり—世人或云雪ハ越後兎の像ニ似たり或云兎の
皮の懸ゆるハ雪中のききしをなかりなりといろく理屈を
つけてんる丁そく後い—新のとき解さハ思ふ日に
懐けり懸をんや—りの類なる—いと満る—

山路来て何やゆ—草叶 芭蕉

湖春日草ハ山よあは芭蕉俳諧ニ巧なりとい—も欣學
なまの過なり去来曰山路をす—れと詠ふる證歌—
湖春を地下の歌道者なりい—新ハ解—らけんいと
たか川—

笠提—墓をぬるや初何處 北枝

先師乃墓ニ詣てお句也許六曰是ハ腹より出句ニ自に
疑有てやとい—人去来曰やハ治定嘆息のや—常に
人を訪ふを笠を提て門戸をす—は是ハ思ひの外ニ
墓成め—る—う—た—た—た—也凡後句ハ—念はもて
ま—笠提て門ニ這入るやとい—疑なく外人のりなる—
春乃蹄をた—一のや雉子の夢 野飛
—ハ春風や廣世に—てぬ雉子お声なり去来曰
—を—てぬ—あ—り合てや—廣き世をた—一のやと
い—ん—や—ま—ん—丈叶曰廣の字行いや—まの蹄と
わ—む—去来公腹す

馬の耳すかめをきく梨子の花 支考

去来曰馬の耳すかめをきく梨子の花 支考
とつてしるしを州なり支考曰何のうきまきりあつらん
吾子の如くかいらより一とらにいついふてきむしを難き
るなれし論す曲翠曰二子互にえさるまを易と
治さるを難しと其論ともんをなり志しとも過休
といふ一とらあひ下らんかかると一去来曰翠亦
えりれさる故なり凡修りき我うけさるまをやい
いさるえさるまを學り次すにすみかんたのれ終に
けさる不ならして代の捕さるまをさるまをやすすハ切を

あすすの終にあつてん

白水のなうりもきうふ為系が 木導

其角曰おハいさつあるお顔なり去来曰角いられと又ま
とおもつるめや是ホきカもなると一ききハ冬れあ休也
うおをよ月毛の釣の扱明うか 許六

去来曰予此趣向ありきうき有明の花よ衆込とらひて
河毛駒芦毛馬とき顔つすれまの文字を入れ口に
たすけり鞍馬を推あつて紅梅錯月毛川系毛かと
おもひめくくそそ尾せりしうき後許六うきとんて
不才と嘆すうに畠山た朱門佐といへ大名のなると

山畠佐左衛門といふ一字とついでに彦左の名なり先師曰
句とねとすんハ舌頭ハ千轉せうとありーもいふ事
起さぬにあまうつとありー廢の足・杜若
乾鞋と唱くくりや油は、雪也
くくい寸の時てんさんをなうたう

去来日伊賀の連流もあはなる風あり是則先師の一針也
迂化の後すくまー新のころの類なりそそ愚なる
もそ及くー支考日伊賀能句ハさせるともまもあは
いやとふー伊賀の連流も上手なり

雪の古よ糸とや花乃 糸 羊残

去来日まうくはといそ風情わー乗りとついでま
句もなるまうーでやの文字千金なり羊残ハまもあは
考也丈艸曰てやといつるあうり上手のこま血ーとんく

くくい寸は刃とさうまねおきか 其角
雪の岩もすりりそおき、のれ 素行

去来日角く句も暮春の乱雪也初雪も刃と違ふる曲新
初の字ハゆー一行く句ハ雪雪の姿あは出さすうあま
考は怖れて花あうりそすこ或ハ罽捨おは又まうより
くーくハゆいそなまうさななり凡あはを記さ向もま
中情を知つた也去くさる時を珍物奇言も巻とくく

ま本情を交さるる一一角う功者す時をりて過て
るま一初学の人情ますんハあまうう

相の本能風がまうぬ落る事 凡兆

其角曰是先師の檀の本能等類なり兆曰志うん
詞つきの似る能をほくそら大西かひまう去来日
多たともいひう一同業の自なり同業を改て能せ
平うぬの地ぬも落さぬ付るふと一業とうり
滝川の底つりぬく養かと言出ていきり手振
な一さんを兄より生れ捨さるんハ又吾をなり

駒寄りに出逢ふ野明の草子 野明

去来曰約答ふ人の出逢ふは能せこの落るや又ハ世に苦の
風情を野明曰為のよなり去来曰うめよりさハ
情れと吾子能俳諧の初上達せんとも思はさり一故
たうねとらま入情るの支考曰句能秀拙ハともうも
野明此場を志う向るうつ不審也と密吟守平以人成
教るりの年あり着て通せん一とせ先師女日るり能落
ま依せしれより後群上をせり常は俳友なる修り
むな一能れとも先師をうめ大州支考なとれや一
今吟しそ外のこる功を志うね板木の月うかた
句もか来り誠なる事とさむ一平平生記意の

弱きを難くす

あ——山嶽のつ——栗の穂 小五郎
花散て二日君はぬ 夢系うを

正秀曰嵐山を少年の句を——そちも風流ありをを
無功の入——君も少年の句といひ——去来曰
二日とてたぬとい——あ——代家の懐きま——
蕉門の大子嬌よまなり

あめの心安さよけ——みを 越人

其角許六にもに云は句いひおほせさる故に僧に別る
とてといひ。あまあり去来曰い出栗一俵の句とて

おほせさる妙ありとて——そ程よあり

電のうきませり 園夜うを 去来

夫折支考とも曰下の五文字過り田つ——やとて
有——去来曰物とを——た——言授なりあ士曰最
句を——と論すも後夫折に語て日退て思つた
あ士を電の句とてん——向——ん只電の後折園扱の句也
故に折とて中傳る夫折曰さうりいん——た——ん

ほととす帆裏まなや夕まなれ 先放

七しめハヤを明石浮といひは渡を集まわ——あかせり
可南曰いなる故もや去来曰時を帆裏まなやとて

こゝ景情たはり可なり一は明不浮をこゝにむるはこゝろお
祿をりあらん可南曰同集の弁七う子親も明るこい
かり傳るや去来曰弁七う獲自ハ趣向を二つこつとりかき
地するもおあらん又下意を指せて伝るるこゝも格あなり

とくははるもあらん子美 辨 玄梅

許六曰是を説經をゆゑと感せん若くをなうりりはお整也
又曰人あり路とよそくをまひてよつやり一は下つやり一
とるを言ふとよそくをまひてよつやり一は下つやり一
とつやり上を懸ひて下を決一はゆゑ語路不通なり
又懸ひて決るるとつやり一は下つやり一は下つやり一

疑ひありて下をよそくをまひてよつやり一は下つやり一
よかよし許六曰あちちよそくをまひてよつやり一は下つやり一
お一は也

鞍壺よ小坊のめくや大根引 芭蕉

風國曰此句いかなるまより面ふま去来曰吾子いづの解一
とつやり一は下つやり一は下つやり一は下つやり一
奇山幽谷靈社古寺禁観のよそくはさるよそくはさるよそくはさる
ういゑさるよそくはさるよそくはさるよそくはさるよそくはさる
みさあらん孫一は下つやり一は下つやり一は下つやり一
てかこらるおとつやり一は下つやり一は下つやり一

國のわしをよそ用ぬらんを今猶一く本情の候ふる
國あつた是と盡とふ一てもあつむ句とあつても
よつらんをほえ大根引の傍ふ草をむ馬の首うち
さけさむ鞍つたは小坊のちよつらりとあつた國
おほくも言らんや掛くむや案一もあつた一
國り兄何某却て國よりも感動すくは、能遊を
志しあといても盡とあつたすも故也画師尚景
子なり

夕々れを種をちうくや寺乃秋 風國

此句を一ゆき晚鐘のさくくあつたあつた句は忘る

風玉曰此は山寺に晚鐘をまくに曾てさみくも
依て他を去来日是殺風景也山寺といひ秋のゆつ
とつひ晚鐘といひ寂くあつたの頂上なり志くは
一端遊興騷動の内を聞さみくは、一己の
私なり風玉曰此時は情あつたは、情あつたは、
あつたや去来日若情あつたは、情あつたは、
あつた句は、あつた句は、あつた句は、
あつた句は、あつた句は、

應くといつと敲くや雪の門 去来

夫州曰此句不易うあつたあつたのち中を、あつた

支考曰いふやして新あまき毎よりいふもや正秀曰た
先師のすねごとを恨みよ曲翠曰句の吾意といふ
尚時他せん人をきくはといふ其角曰去の雪の門也
許六曰を佳句也いふ十分あり露川曰ふ文之妙之
去来曰人くの評亦たのくく位より出つ此句を
先師近化乃冬の句なりも此同門の人にも難しと
おもひよるは自代とも此場よりきくは

数年のふ髪や神の光を去来

大宰府奉納の句なり許六曰後句は切字二つ周るは
法ありは句切字二つの病あり去来曰平多て切字二つあるは

さるなりさるきともこれと切字の用は

ふもや戸板ねさゆ山乃中 助童

去来曰は句切字の上業あり句は風客あり結語滞るは
情秘をりなく事あり〜 最尚時流り乃を
中也世上の句おほくは免す故に角をあたはる中
ふありあひ或は目かとりよとすん切の井とあは
〜 燕暖着の下くはるおきなり此兒は下地ありそ
うな牌に学つていふさりの他者よりきくは才一いつか
中と理をたは故なりも〜 愚功のおま〜 おおんて
又いふさりのを理つひもなりあん怖る〜

さしり さや尻くくんる唐の歌 木尊

許六日此句ハ入麻のあつらおくる萩の上風といふ句也
去来日吹送るの歌を新編抄山と帰るを名をいふ句
らけを唐一体のさしりさけいふ句趣意各別なり
なる句

唐泰二うけろふ新や又まつる 洒堂

洒堂日路通いふハ唐泰を粟も稗もさるる一漢句と
なりくくく也去来日路通いふハ句新花実を志す
ハ唐故也ハ句を新乃葉葉ハ火氣のあれくも妙く
賦くく也一句の長く江ありき唐泰ハ唐泰も粟稗も

き場子叶くく物を用くくハハ句の花実ハ粟葉をく
くハハ初けを新の句也花ハくくも有ハハ句内新なるを撰用の

霊糸くまけぬさき新父糸 耳泉

去来日音子ハ出生らあ子父を喪くけふや耳泉いふ
きく手送葬くけふ去来日然れをくけ代人の句也
音子ハ新くくをくくくハハ句凡漢句を吟するに意ハ
聖賢佛神の境も遊ふ新く一書を禁裏仙洞の
くハハもアハハハ食素門の上もたよふハハ句に
ねいさハハ身外を吟せハハハハ
書と求めけくん

浄余・清やあまねまを彩は五尼 許六

去来曰七字彩のくくさんはいく是と云さハ一句をとり
お事ん許六曰志をとりハ自然の事と求て他す一く是ハ
七字を以て巻句となる也甚角もさくそと評しゆる

門口や牛王めくらねて初しんれ 此言お初

去来曰此句表根より見せしんもた甚角う韻法解カ
門れの句と名れと評す平云誤なりと云ハ少一
似しゆるもけハくくくく嬌い除て一句う熱体と云ハ
門とらひれとらふそとや名れの評をなせりいと云る一

猪の鼻とすつうす西氏也 卯七

去来曰させゆるのな一之四分の句なり正秀曰猪なと
こそ鼻とくすつう一くんとをほひくりに後先作も
一興ありと云り去来曰退て思ふ此れいふとよ方ハ
西氏めつ〜〜〜西秀もさねふんより猪のめや
〜〜〜風情をせり平ハ西烟くあれを西氏も
貞花子のさくさ〜〜〜おまんさり〜〜〜
ゆ〜〜〜熱て人の句をまくにふり〜〜〜
さ〜〜〜鹿の鼻を定て退行
人の汗をた〜〜〜い〜〜〜勢也

慢びて人を尋よやすさ〜〜 其角

許六曰是を謎といふ句也去来曰是ハなをんもせよ
一何せざる句也たとへて提燈て人と尋ねるといふも
まは提燈もてたのよせよなをんちよとていふんやとん
人とたつていふよとをいひとり合点しといふも
むりー問句といふ物ありそれ句は切り捨ててを
びのおやとてましく句也は句をさう難もせよ

あさうほに第ごち〜〜男が 風毛

曾町曰此句或人の長矣也いふ去来曰漢句といふは人の
杜年曰先師の漢よあま〜〜男がといふは秀か
ありや去来曰先師の句をさう角う夢う堂といふは他を

巧い句の答也句よ〜〜〜答るるは趣あり風毛を
あ後表裏一の見〜〜あ〜〜新の〜〜句は口をひ〜〜け
出るも然なり〜〜他て見せん何なりと題をおさ
曾町別露の句とて〜〜あ〜〜襟を〜〜ゆふあ浪が又
柔の題もて菊咲てあ根のかさりや山田と十題十句
言下は賦〜〜〜若〜〜〜句は疑もあ〜〜一題十句
せんといふ曾町別露の題をおす娘より嫁の喜よ〜〜
砧や紫掛の賦をさあ付砧かといふと〜〜め十句
とたうす平ハ蕉門は吟才一の名ありて〜〜新の〜〜況や
集りも出〜〜先師の句を〜〜各あ〜〜ありと〜〜

去来曰尚時世間の仙者翁の葦の句あるを居はくこの
本槿などの句作まよひあきまよひ句と吐かへ芭蕉流
とたゆえに族おかへし軍みきしせんふらんと
記すも然也

年とやあ中の礼を星月夜 其後

元日や土つふに教もせん 去来

許六曰尚時元日とらふ冠用うまき経あり去来曰
元日ハ獨ふつふ云ふあはれやの字も懐みまこゆ
け難なるへへは句元日といふ人外なりやハ嘆羨
とる也許六曰其角は句と吟し喜まといて歳旦に

あはれ元日ハいひ言ひとるゝと家ハ先師曰ささうり社
他者のく自元日といふ人ハ拙くもへへとて年とやとを
重なると又やの字ハ嘆賞のやとふハなり五つは
やハ疑のやとを習ゆる去来曰其角は句とたいてハ
先師かくのささうへへへ予は句においてまさいのたま
ハハ他者乃甲乙ともて云ふをあはれ己くう志す
ふよ遠あり平ハ孫抱新詞ともて常ハ才ニ等ハ
重なるそこハ先師も能見ゆるへへへ又嘆羨カ
やハ名目もまなり名目と以ていへ治定のやハ治定
もも嘆息嘆羨あり世話もまなりや虎山前切なり

やむさう坊なとり、皆決定嘆羨也と論す、後賢
判一終一

風國曰、彦根の羨句一句、季節と二つ入る、ひくせあり
新句一、や去来曰一句、小季節二、三、五とも疑なる、
もとより好む事、もあつた

許六曰、一句、季節と二つ用ゑる、初句のなり、この事也
季と季の、かよふ、あり去来曰一句、小季と二つ用ゑる、
ハ功者、初句、よる、く、は、さんと許六の季の通、よる、
習あり、といふ、事、予、い、す、い、知、さ、る、事、也

盲より、啞乃、う、い、ゆ、ふ、月、見、の、る、
去来

去来曰、此句ハ十七八年前の句なり、も、は、先師もも、
せ、れ、世、と、も、ま、あ、る、句、也、を、事、新、
感、涼、一、と、い、も、句、位、と、論、さ、る、に、至、て、ハ、甚、下、品、也、
蕉門の俳友中、此、様、を、な、る、句、こ、れ、以、或、連、歌、師、の、曰、
花、の、も、と、ん、て、け、句、の、評、あり、俳、諧、も、か、る、感、情、の、句、あ、は、
あ、つ、り、く、く、と、な、り、是、を、羨、せ、く、何、と、ま、け、ハ、く、時、の、
連、歌、師、ハ、こ、れ、も、一、く、に、お、も、い、は、る、

季、牛、花、の、裏、を、見、せ、り、風、の、秋、
許六

一、説、け、句、先、師、の、暮、の、葉、の、面、見、せ、り、と、等、類、な、り、と
許六曰、等類、あ、る、に、見、せ、り、と、を、初、め、む、い、は、る、

類向かいし去来曰等類といひいさし同泉の言なる一
たといと和哥よき花さうぬ常盤の山の雪いたのれゆてや
まるとあしんとまにみよせぬ常盤の山の小男麻いたのれ
あきてや秋をさうしむとみても多敷うきあしゆとよ
俳諧よきまを思あるしき事也

志くゆや紅の小袖を吹うし 去来

正秀曰いとにゆるも能あしなれたの類まを去来生の
句層也去来曰正秀の評いすし解しゆは予ハ
志くれもて来る嵐の路よみおの小袖吹うし
けしきハ紅葉吹たる守山たるし風の詠たる

一の俳諧なるしと他しゆるまてなり

と川のぬるこに丁と志くゆ

生翹のひらくするまよのせ

ととへりやうし乃とぬ

去来曰け附句臺よのせといつるおいのこの脱後と極て
けふるしりやうりひらくしとてさうしりなるとあり
まほしきしと次の附句まてもようしびかほせよあり
句体まくなるとあり想て一句にいひそしとまとい
けしきも能ある

梅の花赤いさくおういさか 惟然

去来曰惟然坊々今の風大々々乞木の敷なり此後句の
あゝ此先師迂化の歳の夏惟然坊々詠諧と導引
手ゆゑの口實のまよりすめて疎濛よさなりくと
浪しとて或ハ枚の本よすくと風の吹りなりと
いふを羨し終ふ又俳諧を氣持みて吾分別を他す
一一とのいさひ亦は後いよく風体々るらんなどの
あひまの事と同あよひかゝゆまの川うけて身の集の
哥仙よゆる妻よゝ姫子あくるくくの雪け句なるとに
先師評一終へる句勢句姿なるといふこの抱くうたハ
みなく忘却せしゆと見えたり

行のて見五湖烹煎の音とす 素堂

なき人の小神もいさや土用かー 芭蕉

素堂子の句ハ深川芭蕉菴にたけり終ふ句なり先師の
句を予の妹々方あがりくる以英波の国より贈る句なり
ともにそとりの残いさむたの中よ本れははある集と
いふ先師の事とも出らるるは素堂子の
句とあけり癖のたの中よ来るは我もて名人と名
らねりそれをもて名人といふも我ら先師の
句もかくのこゝ皆人の知るる也るはのこゝ
世話も人事いさめ志るおけといふ一氣の感通

自然の妙應かゝるも亦あるも然と云ふ一誠子痴人
面前後を説くすなり

梅白一まねふや鶴と盗あり 芭蕉

去来曰言後集よけ句をあげて先師の事とならうけ句
辱つつ一りといつて是亦ハ相のさうろを弁へて評せり
秋風ハ洛陽の富豪を生れて市中を去山家は閑居して
詩歌をたのしむ驕人を愛すと図るなりは速つらま
更にかれを風騷の隠逸人とおもひ返る文他あり
いゝありとむも後折付とも折返りけやけ評文
たふふりけい論なること誠知れり

くさのすの海向てなく涙すの浦 卯七

雪もとろくめ他せり野坡曰もとおもひ返る文他あり
の文字よろしく去来も是も同一なる文軒曰のと
いいて風情ハ情情とたうにもといふんまき
一と也

